

Title	ワルター・ラカー著『革命の教訓』：ソビエト史論
Sub Title	W . Laqueur, The Fate of the revolution : interpretation of Soviet history
Author	中沢, 精次郎(Nakazawa, Seijirō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1971
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.44, No.9 (1971. 9) ,p.143- 145
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19710915-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Walter Laqueur,

The Fate of the Revolution

— Interpretation of Soviet History —

London, 1967, viii + 216.

ワルター・ラカー著

『革命の教訓』

——ソビエト史論——

本書は、「はしがき」と、つぎのような九つの章、すなわち第一章「ロシアと西欧」、第二章「ソビエト研究の発達」、第三章「一九一七年」、第四章「レーニン論」、第五章「スターリン論」、第六章「E・H・カー」、第七章「ソビエト史学」、第八章「ソビエト史の解釈」、第九章「革命後五〇年の歴史の教訓」、以上の九章からなり、それにごく簡単な Bibliography が付されている。目次に記された各章のタイトルを一見したかぎりでは、相互の結びつきの希薄さが気になる。しかも、本書の表題には『革命の教訓』とあるが、歴史に教訓があるとすれば、それは教訓がないということではなからうか。しかし、そのような印象や疑念は当つていない。高度の専門書とはいえないが、示唆に富んだ指摘が随所に見られる。

紹介と批評

ロシアの西欧への窓は、周知のように、ピョートル大帝によつて開かれたわけであるが、当時の西欧における対ロシア認識は、W・ラカーによると、ロシアはアメリカ・インディアンの土地と境を接した国であるといった程度のものであつたという。「地の果て」ではないにしても、辺境とみられていたロシアが、西欧の旅行者や歴史家の手で活字の上に登場したのは、一九世紀にはいつてからのことであつた。とくにドイツでは、ペテルブルグやモスクワの居留外国人のほとんどが圧倒的にドイツ人であつたことまた地理的にロシアと接近していたことから、ロシア研究は他の国と比較して非常に早くから進んでいた。たとえば、『Zeitschrift für Osteuropäische Geschichte』とか、『Russische Revue』といった雑誌がすでに一九世紀に刊行されている。もつとも、現代的な意味でのロシア・東欧研究の専門雑誌の刊行は第一次大戦の直前であつたが、ドイツのロシア研究に刺激されて、イギリスでは一九二二年に『Russian Review』が、またフランスでは『Monde Slave』が一九一七年にそれぞれ創刊されている（ドイツの月刊誌『Osteuropa』はフレスト・リトフスクの講和の成立と同時に創刊された。しかしロシア研究は、なんといつても、一九一七年の革命をむかえて飛躍的に発展した。当初こそは、レーニンは「その本名をゴールドベルグというドイツのスパイ」であつて、「……信仰をすてたユダヤ人一味の頭目」で……、『Maximalist』であるとか、ボリシェビキ政府の首脳部はすでにモスクワを脱出し、海外への亡命を準備中……新政権は崩壊に瀕しているといった誤つた報道や誤つた解説が相次いだが、より具体的

な情報が直接に、つまりより正確な資料が次第に豊富に入手できるようになるとともに、ロシア問題の解説や論評が積極的に展開されるようになった。ロシア革命の諸相をその内側から伝える手記あるいは回想録などもつきつきに現われ、革命をあるいはその後のソビエトの発展を対象とした書物はいよいよその数を増した。個々の事件の具体的なプロセスのあるものは一般に確認されているとはいへ、解釈をめぐる諸説が入り乱れ、さまざまな論争が続いてきた。社会革命党の歴史的な役割、メンシエビキの政策、レーニンの歴史的意義、ケレンスキー政府崩壊の原因、トロツキーの功績、スターリンの存在理由など、争点もまたきわめて豊富である。いずれもソ連史家が当面してきた、また当面しなければならぬ問題点であることは述べるまでもない。著者W・ラカーは、実は、こうした問題点を徹底的に洗い出し、またすでにこれらの問題について公けにされているさまざまな解釈を挙げて検討を加えているのであつて、各章はいずれも、本書のこの企図に忠実に奉仕しており、内容的な連関を欠いているわけでは決してない。

ところで、「資料のないところに歴史はない」という観点からすれば、なるほど現代は未完の過程であり、また確定的な資料は極度に不足しており、したがって現代は史的研究の対象となり難いことにならう。また専門の歴史家が指摘するように現代史研究には「うす気味悪い誘惑や落とし穴」が随所にあることも否定できない。それ故にこそ、専門の歴史家は一般に現代を取り扱うことを避けてきた。しかし、著者は、ランケ、ティエール、あるいはギゾーが一八

四八年の革命から非常に強い影響を受けたことも否定できない事実であつて、そもそも歴史はすべて現代史であり、また現代史であらねばならないと強調する。ところが、著者によると、現代は開かれた領域、つまり参加資格者が専門の歴史家へのみかぎられた領域ではなく、とくに、二〇世紀最大の政治的事件の一つであるロシア革命とその後のソビエトにおいて生じた事態はむしろ歴史の非専門家の手によつて取り上げられてきたという。この点に注目して、ロシア・ソビエト問題を扱つた哲学者、社会学者、ジャーナリスト、外交官などの著述が手広く紹介されている。B・ペアーズ、H・カール、W・チェンバリン、H・フィッシャー、B・ウォルフ、I・ドイチチャーの、あるいはまたA・ケレンスキー、P・ミリューコフ、A・デニキンといつた反ボルシェビキ、A・ポクロフスキー、N・ポポフ、E・ジュコーフといつたソ連の歴史家などの解釈が比較検討されていることは指摘するまでもない。各章はまた、いずれも、これまでに試みられたさまざまな解釈の紹介とそれぞれについての著者の短評を内容としている。

本書は、著者によるとソビエト史の入門書であつて、それ以上のものではないという。勿論、著者は歴史には言葉の厳密な意味での教訓のあり得ぬことを承知している。一九一七年の革命から、ソビエト体制五〇年の歴史的経験から、教訓らしきものを無理に引き出して押しつけようとしているわけではない。著者が企図したものは、ソビエト史研究の専門家とソビエト史に関心をもつ一般の読者との間を架橋することであつた。著者がきわめてひかえ目に表現している

教訓とは、ノンベトナム史の専門家の側から与えられるものではなく、一般の読者がそれぞれに読み取るものとされている。

(中沢精次郎)

Paul F. Langer and Joseph J. Zasloff,

North Vietnam and the Pathet Lao:

Partners in the Struggle for Laos

Cambridge, Massachusetts, Harvard U.P., 1970,

x+262pp.

P・F・ランガー、J・J・ザスロン共著

『北ベトナムとパテト・ラオ——』

ラオス内戦の協力者達——』

一

本書は、ランド・コーポレーションの社会科学局において極東問題を担当しているランガー氏と、同じく東南アジア問題の専門家でありピッツバーグ大学の政治学教授であるザスロン氏の共著となるものである。

長く歴史から忘れられていたラオスも、一九五四年、特に一九六二年のジュネーブ会議以後、国際社会の注目を浴びるようになってきた。それにもかかわらず、ラオスに関する学術的文獻、特に独立以後十数年、内戦に明け暮れてきたその国内情勢について分析し

た書物は非常に乏しい。本書は、この内戦の一方の立役者であるパテト・ラオ側と、その強力な支持者である北ベトナムとの関係を綿密な資料を追いながら明らかにしようとしたものである。特にパテト・ラオ、北ベトナムあるいは北京やモスクワ等から得られた資料の分析と共に、五三名のパテト・ラオ軍及び北ベトナム軍の捕虜あるいは逃亡者とのインタビューの結果を豊富にこの研究の中に取り入れ、それによって従来ミールに包まれてきた共産主義運動内部の構造、機能を動的に伝えることに成功しており、それが、従来の研究にない興行をこの書物に与えている。

さて、本書の内容は次の通りである。

1 Introduction

Part One The Past

2 The Setting of the Lao Revolutionary Movement

3 The Growth of the Lao Revolutionary Movement and the

Vietnamese Role

4 The Drive for Independence: The Viet Minh and the Pathet

Lao, 1949-1954

5 North Vietnam and the Lao Communists' Bid for Power,

1954-1962

Part Two The Present

6 The Context of the Current Struggle

7 North Vietnamese Advice and Support

8 The North Vietnamese Military Adviser in Laos: A First-